

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察 —新約聖書を中心に—

柴田智世
尾上明子

はじめに

紙芝居が、保育メディアとして位置づけられてきた背景については、すでに鬢櫛¹⁾らの研究によって明らかにされている。キリスト教の福音紙芝居は、先駆者であるキリスト者の今井よね(1897-1968)によって開発され、そののち、関屋友彦(1909-)へと受け継がれていく。関屋は1948年に「基督教紙芝居協会」(のちに1957年に書店「聖山堂」を開業)を設立し、その普及に尽力し、戦後の福音紙芝居の歴史に残した業績は多大なものであると考えられる。²⁾

また、本学では、紙芝居研究を学内の研究プロジェクトとして取り組んでおり、学生たちも授業や実習で紙芝居を積極的に取り入れているが、紙芝居を選択する際の視点については、これまでほとんど言及されてこなかった。特に、一般の紙芝居と比べ、キリスト教紙芝居を選択するにあたっては、その基盤となる聖書を理解し、紙芝居の示す意図を踏まえつつ、その作品が聖書の示す福音を正しく伝えているかを判断しなければならない。本研究において、聖書の出来事・物語を紙芝居化する視点として、聖書解釈に加え、時代考証や子どもに理解できる言葉の問題などいくつかの要素があることが分かってきた。

1. 研究の目的

本研究では、キリスト教紙芝居を保育に取り入れる際の一つの指針を探っていきたい。前述したように、一般の紙芝居選択よりも困難を伴うのは、聖書に基づいて作成された紙芝居であるがため、まず、聖書を理解するところから始めなければならないという点である。聖書を理解するためには、本来、語源からの解釈が求められるが、一般的には註解書を読むことから始め、2000年以上前の時代考証、物語の意図するところの正しい理解などいくつかの要素を考慮しなければならないという

ことである。それ故、キリスト教紙芝居には、様々な参考書を使いながら、ある程度の学びが前提となると思われる。本稿では、その一つの在り方を探り、学生が紙芝居を選択する際の目安となるものが提示できればと願う。

2. 研究の方法

名古屋柳城短期大学図書館には、歴史的にも価値あるキリスト教紙芝居が所蔵されている。これらのキリスト教紙芝居の中で取り扱われている内容は、主に「旧約聖書」、「新約聖書」、「その他(聖書には属さないがキリスト教のメッセージを伝えるもの、例として『もうひとりの博士』、『靴屋のマルチン』など)」のクリスマスに関連した文学作品などがある。

本研究では、その中の「新約聖書」に登場する人物ザアカイ(ルカによる福音書19:1~10)³⁾と、放蕩息子の譬え話(ルカによる福音書15:11~32)⁴⁾を取り上げる。この2つを研究対象とした理由は、本学の図書館にこれらの聖書箇所を扱った作品が、各4作品ずつ所蔵されていることが分かったためである。こうした経緯から、各4作品の比較・考察をし、更に註解書に基づいて、メッセージの真意を探る。

3. 結果

以下、8作品について場面ごとの分析を行った。それらを次の表に示す。表中の番号は、紙芝居の表示番号であり、気付いた点は、聖書と照らし合わせ比較した。

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察

作品①「ちびのザアカイ」1957年、基督教児童図書刊行会

場面	本文	気付いた点
1	ザアカイは税金を集める仕事をしている。お金が一番大切なものと思っている。世の中は、お金さえあれば自由になると思っている。 ただ一つ思うようにならないことは、背が低いことである。(町の人々からちびのザアカイとばかにされていた。)	⇒人々が背の低いことと税金を集める仕事をしているということだけで、馬鹿にしているのは、説得力に欠ける。聖書にもそのような記述はされていない。 ⇒2000年前のユダヤ社会の状況は、一切触れられていない。ローマに支配され、同胞から税金を取り立て、しかも懐を肥やしていることは、書かれていない。
2	夜になってお金を数えるのが楽しみ。	⇒お金の亡者のように描かれているが、聖書の物語に初めには、「金持ち」とあるだけ。 ⇒イエスのザアカイの心の哀しみ(空虚さ)に対しての言葉はなく、背の低いことだけがどうにもならないことだろうと言う。
3	誰一人訪ねてくれる人がいない。	
4	町の人から、容赦なく取り立てている。	
5	町が騒がしくなった。	
6	ザアカイは人々が噂するイエスを自分も見たいと思う。	
7	ザアカイ、木に登る。	
8	町の人、ザアカイを笑う。	
9	イエスは、桑の木の上に登っているザアカイのところに来て、今夜泊まることを告げている。	
10	ザアカイは、イエスが泊ることを喜ぶ。	
11	イエスは、その夜、ザアカイに対して、背の低いことだけが思うようにならないと思っているが、一番大切なことは友達を愛することだと話す。自分のことだけでなく、人を愛する心を忘れてしまうとイエスは告げられた。それを聞いてザアカイは、生まれ変わった人になった。	
12	ザアカイは、悔い改めて町の人から愛されるようになり、エリコの町も明るく楽しい町になった。	

作品②『ザアカイ』1971年、キリスト教視聴覚センター

場面	本文	気付いた点
1	ザアカイは、税金を集める仕事を一生懸命している。町の人から、けち・意地悪、いばりんぼで嫌われている。	⇒ローマが支配していること、税金を余分にとっていること、背の低いことなどが分かる。聖書には、性格のことまで書かれていない。 ⇒ザアカイの寂しさが伝わる。
2	人を使って税金を集めている。道や橋を渡るにも税金がとられる。	
3	ローマの王さまに渡すためのは、これだけ、後は私のもの、お金にとられている様子が描かれている。	
4	友達がない、死んだらお金はどうなるか?など考えている。	

場面	本文	気付いた点
5	イエスに会ってみたいと思う。	⇒イエスに出会って、初めて自分のこれまでの生き方の間違いに気づく。本来(神)に立ち返る喜びが感じられる。
6	イエスを見ようとするが、人々から意地悪をされて、なかなか見ることができずに、木に登る。	
7	イエスが、泊まることを告げる。	
8	イエスと弟子たちが泊まり、ごちそうが用意される。	
9	人々の声。	
10	ザアカイはイエスに出会って、自分の過ちに気づく。イエスは、その心を喜ばれる。	
11		
12		

作品③「ザアカイ」2001年、キリスト教視聴覚センター

場面	本文	気付いた点
1	ザアカイ「いやあ、うれしいな。あなたもイエスさまの話の聞きに来てくださったんですか。さあさあ…」 ザアカイ「徴税人というのは、みんなの嫌われ者なんですよ…」「そこで…金持ちになってみんなを見返してやろう…」	⇒冒頭から、ザアカイの読者への語り掛けの言葉から始まっており、読者が引き込まれるような記述である。 ⇒ザアカイの職業である徴税人の仕事や、彼の心の寂しさ、(仕方がないので)金持ちになって皆を見返したいという思いが伝わる。冒頭の「徴税人はみんなの嫌われ者」という箇所から、職業の内容を説明するのではなく、“周りからどう思われているのか”という視点で語られている。
2	ザアカイの仕事ぶりの様子が書かれている。	⇒本文にもあるように、彼の血も涙もない様子が伝わる。
3	イエスが町にやってきて、人々が集まってきた。	⇒ザアカイも、噂のイエスを是非見てみたいと思っている。
4	ザアカイもそれに興味を示す。	⇒怪我をしてもイエスを見るのを諦めようとし
5	ザアカイは群衆から殴られたり、意地悪をされる。	しない。
6	木に登ることを思いつく。「やっぱり俺様は頭がいいぞ」と言っている。	⇒この台詞からも傲慢なザアカイの気性が伝わる。
7	木に登ったザアカイ	⇒木に登ってまでイエスを一目見たいという、彼の気持ち(心の飢え渴きさえも)が感じられる。
8	イエスとザアカイが初めて出会う。	⇒イエスの優しい言葉がけに、ザアカイは心の安らぎを感じているように思われる。
9	ザアカイは家にイエスを迎え入れる	⇒ザアカイは、生まれて初めて家にお客様を迎え入れることになった。ザアカイの喜びが伝わる。
10	イエスをもてなす。ザアカイは、自分の罪を告白する。	⇒ザアカイは、これまでの古い自分を悔い改め、神様を愛する生き方をしようと、決心する。
11	イエスの台詞のみ。	⇒ルカ19章9～10節の聖書の言葉に忠実に、イエスの台詞が書かれている。

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察

場面	本文	気付いた点
12	ザアカイの台詞のみ。	⇒ザアカイが神様に立ち返った姿が、喜びとともに伝わる。その後、町の人々との関係について聖書には描かれてはいないが、紙芝居の読者が想像して安心できるような終わり方である。

作品④『ザアカイ』 2005年、いのちのことば社

場面	本文	気付いた点
1	ザアカイは、お金持ちだが、毎日楽しくなかった。友達は、誰一人いなかった。	⇒ザアカイが一人ぼっちであることが分かる。
2	イエスが、来られたが見ることができない。	⇒聖書にあるザアカイの背が低いことについては、本作品には書かれていない。
3	いちじくの木を見つける。	
4	イエスがザアカイの家に泊ることを告げる。	
5	ザアカイは喜んで木から滑り下りてきた。	⇒木から滑り下りた行動から、ザアカイの気持ちが表現されている。
6	イエスは、ザアカイに優しく話す。	⇒当時のローマの支配という状況は、一切書かれていない。
7	人々は、ザアカイのようなずるいことをして、お金をもうけた悪い人としてイエスが食事をされるのだらうと思った。	
8	ザアカイは、イエスの話を聞いているうちに自分が悪いことをしていたと気付いた。だまし取ったお金は、4倍にして返すとイエスに約束する。神様から、離れて悪いことをしてしまう人を救うために来たとある。ザアカイは、イエスを信じ、親切で正しい人になった。	⇒イエスの話の中に、人間の罪の本質は、神から離れていることであると述べられているが、ザアカイが人々からだまし取ったお金を、今後は皆に返すと言っていることから、キリスト教の示すところの罪が表面的に捉えられているように思われる。

作品⑤『放蕩息子』 1953年、基督教紙芝居協会

場面	本文	気付いた点
1	イエスが人々になされた有名なたとえ話であるという但し書きの後、「むかし、あるところに、お金持ちが2人のむすこに住んでいた」という書き出しで始まっている。	⇒昔話風の書き出しであるが、2000年以上前の話であるということは、書かれていない。
2	父が、弟に兄を手伝うようにと諭すが、 <u>田舎が</u> あきあきしたから、 <u>都で働いてみたい</u> という。それに対して、父はすぐに「それもよからう。親のありがたみがわかるだろうよ」と寂しく言い、許可している。	⇒父はすぐに同意している。弟息子の田舎から出たいという動機が希薄である。(下線)

場面	本文	気付いた点
3	弟は、財産を分けてもらい旅立つ。見送る父の気持ちはどんなものかと推測させている。	⇒具体性がない表現であり、特に生前贈与については、対象によっては、おとなの補足が必要であろう。
4	弟は、悪い人たちに取り囲まれ、持っていたお金を残らず費やすことになった。	⇒時間の経過などは、書かれておらず、たちまちお金を失う。 弟を取り巻く状況が淡々と描かれている。(5・6の場面でも同様)
5	お金が無くなり宿屋の主人に追い出される。真っ暗な谷底に突き落とされた思い。	
6	くやしく情けなく体を震わせて泣く。誰ひとり声をかけてくれる人もなく、ふと父を思い出す。	
7	その頃、父は心配げに兄と話し合っていた。息子があやまちに気づいてきつと帰って来る。天のお父様もこんなお気持ちだろうと。それに対して、兄は弟のような親不孝者は家に入れてやるわけにいかないと言う。	⇒父が弟息子を思いやる気持ちがよく分かる。
8	弟は、豚番になり豚の食べるいなご豆でお腹を満たす。弟は、父になにもかもあやまってゆるしを請いたいと思う。しかし、心の葛藤が生じる。ついに決心をし、家にむかってかけ出す。	⇒心の思い・葛藤が丁寧に描かれている。
9	毎日、息子の帰りを待つ父が、ある日、息子を見つけ駆け寄る。	⇒年老いた父の息子を思う熱い気持ちが伝わってくる。父は、年をとって息子の姿が良く見えないから代わりに見て欲しいと雇い人に頼んでいる。聖書では、「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて…」とある。
10	父親は、よく帰って来たという。絵は、抱き合う親子が描かれている。風呂に入って着物を着替え、子牛の料理でお祝いしようと喜ぶ。そこへ兄が帰ってくる。	⇒絵はクローズアップで描かれ、感動的な場面となっている。
11	兄は、宴会の様子を見て、父への恨み言を言う。また、家の中に入ろうとしない。	⇒聖書の記述通り、兄の弟への思いが伝わる。
12	父は兄にむかって私のものはみんなおまえのもの、天のお父様も心からゆるしを請うものを、迎えてくださると言う。いつのまにか兄と弟は、手を握りあっていた。	⇒父の兄への諭は聖書と同じであるが、聖書には兄と弟が和解したことは描かれていない。父親が「どんな悪人でも、悪かったと気が付いて帰ってくる人を…」とあるが、聖書では、「悪人」という言葉は、使われておらず、「死んでいた」「いなくなっていた」人という表現である。

作品⑥『ほうとうむすこ』 出版年記述なし、基督教児童図書刊行会

場面	本文	気付いた点
1	むかしあるところに、お金持ちと二人のむすこが住んでいた。兄息子はよく家をたすけていたが、弟は怠け者で、町でひともうけしようとしていた。	⇒初版（作品⑤『放蕩息子』）とほぼ同じ昔話風であるが、兄と弟をより明確に対比させている。（下線）
2	父が弟息子にむかって兄さんを助けてはたらくように勧め、「楽なことばかり考えるとひどいめにあうよ」と諫める。しかし、息子は財産を分けてもらうように頼む。息子は、父の心が分からなかった。	⇒初版と違い父は、すぐに同意せず諫めている。弟息子が家を出たい気持ちが、初版より具体的となり、説得力が出ている。
3	とうとう弟息子は、出かけることになる。父は、しっかり働き、口先の上手い人にだまされないように、いつも祈っているという。都に行った弟息子は、しだいに心細くなる。	⇒初版より丁寧に動機が描かれている。弟息子を送り出すに当たり、父は励ましの言葉をかけている。
4	町の人はいいカモが来たと思い、たかる。弟息子は騙され、ついにお金を使い果たしてしまい宿屋の主人は、お金がなくなったと知ると、手のひらを返し、弟息子を追い出す。	⇒初版とほぼ同じ。
5	弟息子は、お父さんの言ったことは、本当でなんてばかなことをしたのか悔いる。家で、父が心配し、兄と話し合っている。	⇒前半の言葉は、ほぼ同じであるが、弟息子の悔いる言葉が加わっている。
6	父になにもかもゆるしてもらいたいと考える。	⇒初版と同じ。
7	毎日、息子の帰りを待つ父がある日、息子をみつけ駆け寄る。	⇒初版とほぼ同じ。より具体的な言葉となっている。
8	父は、息子を抱き、よく帰ってきたという。死んだと思っていた息子が生き返ったと言い喜ぶ。	⇒心の葛藤を悪魔の声とし、ついに悪魔に勝ち、家に帰ることを決心する。
9	兄が帰ってきて、弟への父の扱いに嫉妬する。父の兄息子への言葉のなかに弟は、死んでいたのに生き返ったのだから、喜ぼうという。天のお父様はどんな悪人でも悪かったと気がついたら、心からゆるしてくださると説得し、兄と弟はいつのまにか手を握り合う。	⇒初版と同じ。父は、帰って来た息子の姿が見えないから、雇人に代わりに見てきて欲しいと頼んでいる。父の言葉が初版より詳しく聖書に忠実となる。
10		⇒父は、「息子や、ようやく目が覚めたかい。やっぱり、私の言う通りにしていればよかったろう」と説教をしている。初版や聖書にはそのような言葉はない。
11		⇒初版とほぼ同じ。
12		⇒父の言葉の中に天のお父様のことが入り、まとめとしてイエス様が天の父は、この父の百万倍も大きな方なのだと教える。兄弟が和解している。






作品⑦『よろこんだおとうさん』1977年、キリスト教視聴覚センター

場面	本文	気付いた点
1	父「ご苦労だったね。今日も朝から畑仕事をよくがんばってくれた。疲れたろう？」 ヨエル(兄)「いいえ、ぼくはお父さんからいいつけられたことを全部やりましたよ。…」	⇒兄弟にそれぞれ「ヨエル」「ベン」という名前を付けて表現している。この点については、紙芝居ケースにも記載されている。
2	ベン(弟)「つまらないなー。……」	⇒弟(ベン)の怠け者の性格が表れている。
3	ベン(弟)「ぼくは、町へ行って商売を始めようと思います。それでお金がほしいのです。」	⇒弟は、商売をすることを目的に、父親から財産を分けてもらった。
4	町に来ると、今まで見たこともないものばかりです。…ベンはうれしくなって、男たちについて行きました。	⇒弟は町へ出て、周りに刺激されている。そこで出会った男たちの誘いについて行ってしまふ。
5	ベン「ああ、おもしろかった！町はやっぱりいいなあー。」 こうしてベンは毎日、おもしろいものを見たり、ごちそうを食べたりしているうちに、お金を全部使ってしまいました。	⇒弟が、湯水のようにお金を遣う様子が表れている。 所持金がなくなり、誰からも相手にされなくなった。
6	ベン「どうか、働かせてください」	⇒お金のなくなった弟は、仕事を求めるようになり、ようやく豚の番の職を得る。
7	ベン「ぼくがまちがっていた…。そうだ、お父さんのところへ帰って謝ろう…」	⇒食べる物を満足にもらうことのできない弟は、故郷の父親を思い出し、自分が間違っていたことを心から反省する。そして、家に帰ることを決心する。
8	父「あ、ベンだ、ベンが帰ってきた！やっぱり、帰ってきてくれた！」	⇒父の“やっぱり”という言葉から、ベンが必ず戻ってくることを心待ちにしていたと思われる。
9	父「おー、よく帰ってきてくれた。わたしは毎日、おまえが帰ってくるのをまっていたんだ…」	⇒弟が、父親に対して心から詫言っていることに対し、父親は少しもとがめずに許している。 特に、“わたしは毎日、おまえが帰ってくるのを…”から、毎日息子のことを憎んでいたのではないことや、弟の罪を責めず、自分の息子に対する父親の深い愛が感じられる。
10	ヨエル(兄)「なんだと！」	⇒弟の祝宴が開かれていることに対し、兄は憤慨している。
11	父「…わたしはいつも、おまえと一緒にいるし、わたしのものはみんなお前のものだよ。…死んだベンが生き返ったのだ」	⇒かたくなな態度を見せる兄に対し、父親は大きな愛を示している。
12	ヨエル(兄)「お父さんは、ぼくもベンも同じように愛してくださっている」	⇒兄は、父の愛を自分の心に受け入れることができた。

作品⑨『ごめんなさい、お父さん』1997年、キリスト教視聴覚センター

場面	本文	気付いた点
1	兄のタローはお父さんのいうことをよくきいて、朝早くから畑で働きました。	⇒兄のタローは働き者で、父親から信頼されている。それとは対照的に、弟のジローは怠け者のため、父親は困っている。
2	ジロー「つまらないなあ、こんな所にいるのは…。」	⇒昼頃まで寝床でぐずぐずと不満を言っているジローの様子が伝わる。
3	ジロー「お父さん、ほく、町へ行って商売をやりようと思うんです。…お父さんのお金はどうせ兄さんとほくに分けてくれるんでしょう。そのほくの分を、今、分けてください。それで商売をやります。」	⇒ジローは、町で商売をするために、父親から資金としてお金を分けてほしいと頼んでいる。聖書のルカ15章11節以降には、弟の商売については触れられていない。そのため、聖書の内容が歪められてしまう恐れがある。
4	ジローは勧められるままに、一番上等の料理をお腹いっぱい食べました…。	⇒ジローの豪遊ぶりが描かれている。
5	…こうしてジローは持ってきたお金を全部なくしてしまったのです。	⇒ついに無一文となる。
6	「お願いします。何も食べていないんで、どんな仕事でもしますから、何か食べさせて下さい。」	⇒お金がなくなり、働かなければ生きていけないことに気付いたジローは、職を求めてさまよい歩く。そして、豚の飼育の職を得る。
7	ジロー「…ほくが悪かったんだ。ごめんなさい。」	⇒心から自分の行動を悔い改めている。懺悔の気持ちが表れている。
8	お父さん…そうだ召使としておいてもらおう。」 ジロー「兄さんにも悪いことをしてしまった。…謝ろう。」	⇒兄への謝罪についても触れている。
9	ジローが家を出てから、お父さんは毎日外へ出て、ジローが帰ってくるのを待っていました。	⇒父親は、弟が帰ってくることを信じていると思われる。
10	ジロー「ごめんなさい、お父さん。許して下さい。僕は悪いことをしました」「…どうか召使としてこの家において下さい。一生懸命働きます。」	⇒ジローは、自分の罪を父親にはっきりと告白している。
11	タロー「なんだった？お祝いのパーティーだった？」…タローはおこって家の中に入ろうともしませんでした。	⇒兄のタローは、盛大な祝宴をはじめ、弟の特別な歓迎に対して怒りをもっている。
12	タローもすっかり変わったジローを見て、思わずジローを抱きしめ、喜んで仲良く奥に入りました。	⇒聖書では、兄弟が仲良くなったということについては触れられていない。

①～⑧作品のまとめ

作品タイトル・作者 絵・出版年	考 察	紙 芝 居
①『ちびのザアカイ』 文・石谷友人 基督教児童図書刊行会 1956年	絵はシンプルであり分かり易いが、ザアカイの人間性や当時のローマに支配されていたユダヤ社会の状況については、一切触れられていない。 背の低いザアカイを、そのままタイトルにしているが、子ども達には差別意識を与えないような配慮も必要であろう。	
②『ザアカイ』 文・久山隼児 絵・村岡 登 基督教 視聴覚センター 1971年	紙芝居の根幹ともなりうる絵が大変丁寧で明快であり、時代考証もなされているように感じる。内容では、ザアカイのパーソナリティーを規定して良いのだろうかという疑問が残る。しかし、解説が丁寧に書かれているため、それらをしっかり踏まえて臨むならば、紙芝居が生かされ、聖書のメッセージが伝わる。	
③『ザアカイ』 文・中島善子 絵・西村達馬 基督教 視聴覚センター 2001年	作品のケースに、「目標」、「解説」、「使い方」が詳細に書かれており、用いる際の適切なガイドとなるであろう。 主人公であるザアカイの置かれている背景や気持ちについて、現代の子どもが受け止めやすい表現がなされているように思われる。	
④『ザアカイ』 文・大越結実 絵・G・エヴラール V・グロベ いのちのことば社 2005年	絵が大変簡素な描写でかつ、単純、アニメ的でもあるため、ザアカイの人間性や当時の雰囲気伝わりにくい。内容では、時代背景やザアカイの特徴について書かれておらず、中身の薄さを感じる。	
⑤『放蕩息子』 作者不明 基督教紙芝居協会 1953年	絵は、時代考証もされており分かり易く、紙芝居の特性を生かし描かれている。しかし、2000年以上前の出来事であるという背景などの記述がなく、補足が必要であろう。説明の言葉が少なく、物足りない面がある。 物語の最後に、兄弟が和解したことになっているが、聖書は父の言葉で終わっており、和解したかどうかは読者の想像に委ねられている。 同じ場面で、父が「天のお父様は、どんな悪人でも、(中略)心からゆるして迎えて下さる」と書かれているが、子どもに分かり易く伝えることを意図しているのであろうか。一方で、聖書のこの箇所では「悪人」という言葉は使われていない。	

作品タイトル・作者 絵・出版年	考 察	紙 芝 居
<p>⑥『ほうとうむすこ』 小谷野判二・画 基督教児童図書刊行 会・編 出版年記載なし</p>	<p>前掲の『放蕩息子』と絵や話がほとんど同じであることから、第2版であろうと推測される。</p> <p>初版に比べ、内容が詳しくなり充実した。天の父なるお父さんがどのような方なのか明確になり、聖書からのメッセージが伝わりやすくなっている。12場面で、絵には父を中心として兄弟が手を握り合っているが、聖書にはそのような和解の雰囲気は描かれていない。</p> <p>出版年が記載されていないが、出版社名が、基督教紙芝居協会から基督教児童図書刊行会に社名変更したのが、1954年頃であることから¹⁾、本作品はおそらくその頃に出版されたと考えられる。</p>	 
<p>⑦『よろこんだおとうさん』 文・野沢泉 絵・村岡登 キリスト教視聴覚 センター 1977年</p>	<p>絵が温かみがあり、大変丁寧に描かれている。この時代の様子を表していると思われる。</p> <p>物語の結末が、絵では兄弟が仲良くなっている。聖書にはそのようには描かれておらず、読み手の想像に委ねられている。</p> <p>紙芝居のケースに、「解説」と「使い方」が記載されており、この作品を演じる上で重要な導きとなる。「解説」に、「父の愛（神の愛）からは、弟よりもはるかに離れていた兄息子は、わたしたちの姿なのです」と書かれており、聖書からのメッセージが伝わってくる。</p>	 
<p>⑧『ごめんなさい、お父さん』 文・高見澤潤子 絵・狩野富貴子 キリスト教視聴覚 センター 1997年</p>	<p>絵は、日本の昔話風な描写である。兄弟の風貌が学童児くらいの年齢に見える。青年らしい雰囲気が感じられないことが残念である。推測ではあるが、子どもに聖書のメッセージを伝え、分かり易くする意図であろう。しかし、2000年前のユダヤの話という背景については、どのように結びつけるのか。</p> <p>物語の終わりが、兄弟が仲良くなったという結末になっている。しかし、聖書にはそのように描かれていない。</p> <p>12場面で、父親の言葉である「ジローは生き返っていい子になって帰ってきた」という箇所、いい子でなければ罪許されないという考えを子ども達に教え込むことになるのではないか。</p>	 

4. 考察

(1) 「ザアカイ」(ルカ19:1~10)の註解書による考察

ザアカイ物語は、新約聖書における共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)のなかで、ルカのみに記載されている。この物語はいわゆるイエスの譬話といわれるものではなく、実際にあった出来事とされ、信徒であれば「ああ、ザアカイのお話ね」というほどよく知られ、子どもにも馴染みやすいお話として親しまれている。また、「ザアカイ物語」が、他の物語に比べ、複数の紙芝居作品が出版されていることは、イエスとザアカイの出会いがドラマチックであり、物語として構成しやすい要素が多分にあり、紙芝居としては取り上げやすいものであるためであろう。

ザアカイは、ヘブル語では、きよい、罪のないという意味がある。⁵⁾しかし、ここに登場する人物は、皮肉にも取税人の頭(地方取税所の所長)で、ローマの要求する額を支払い、規定以上に取り立てた残りの金は、自分のものとして不正に富を蓄えていた。(ルカ19:2)。それゆえ、同胞から「罪深い男」(ルカ19:6)と嫌われていた。今回取り上げた紙芝居4作品とも、この時代の背景は、一切描かれておらず、ただ、不当なことをして得たお金の亡者として、また、悪人として描かれている。(『ちびのザアカイ』1971年、『ザアカイ』2005年)

一般に子どもが対象とされる紙芝居であるから、複雑なことは省略したのであるか。また、子どもには、難しいからとするのであろうか。一言でも、触れる必要があるのではないだろうか。なぜなら、税金を集める仕事や身長が低いことによって、人々の蔑みの対象となる印象を与えかねないと思われるのである。

聖書は、ザアカイは「背が低かった」ので、人々に遮られ、イエスを見ることが出来ずとある。しかし、それ以上のことは書いていない。作品『ザアカイ』(2005年)には、背が低かったことも、言葉として書かれていない。これは、重要な物語のポイントを省いているのではないだろうか。一方、『ちびのザアカイ』では、ザアカイの体の特徴をタイトルによって規定しており、そのことがポイントとなっている印象があり、危険性を感じる。

物語の最も重要なポイントは、ザアカイの心の哀しみ(空虚さ)であろう。ザアカイは、心の渇きのようなものを感じていたからこそ、イエスを見たい(会いたい)と思ったのであろう。ここで、ザアカイは、機知に富んだ行動をとり、威厳を保とうとして悩むこともしなかった。⁶⁾多くの人々が見ている前で、走り出て「いちじく桑の木」(ヘロデのローマ趣味によって植樹されたと言われる。)に登ったのであるから。それほど、彼にとってイエスは、必要であったのだろう。

作品『ちびのザアカイ』では、前述のように背が低かったことだけが、思うようにならないこととされ、友を愛することが一番大切だとイエスに諭されている。しかし、お金に捉われているという設定のもとに、ザアカイの空虚な心はほとんど強調されてない。『ザアカイ』(1971年、2005年)も、同じである。

R・シントラーは、『聖書物語』で、この点、すなわちザアカイの心の飢え渇きに重点を置き描いている。大きな屋敷を構え、蓄えが十分にあり、家族がいて、使用人がいたとしても、ザアカイは、人々から嫌われる生業をしていることは、十分に承知し、自責の念に苛まれていたのであろう。

シントラーは、ザアカイの孤独、そして、ザアカイが聞いたイエスの話(神の国の話)を想い起こし、ザアカイにこのような自分も救われるのだろうか、神の国に招かれるのだろうか、と、言わせている。イエスは、心の空虚さを見抜かれる方であるから、木に登ってまでイエスに会いたいと思ったザアカイに「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」と伝えている。聖書では、「きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから」⁸⁾と訳している。また、直訳では、もっと強く「私は泊まらなければならない」となるとし、イエスとの出会いは、神の必然で生起するというのである。⁹⁾故に、自分こそ正しいと思っている人が、神の国に入るのではなく、罪人とされる人々にこそ、神の国が用意されていると言う。ルカ19:9-10で、ザアカイが不当に取り立てていた税金を規定以上に返すと宣言したとき、イエスは、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを探して救うために来た

のである」と述べている。「アブラハムの子」は、真のユダヤ人を指し、アブラハムの信仰に従う者という意である。¹⁰⁾ アブラハムの子孫や人種の問題ではない。イエス（神）の方から近づき、それに気づいたザアカイが人生を方向転換した、すなわち、本来あるべき姿に帰ったことこそ、救いの喜び、真の幸せなのである。このザアカイの喜びが紙芝居作品を通して伝わるのが望まれる。この物語の重要なポイントを失うことなく、紙芝居が伝達されているかが大きな問題である。

(2) 「放蕩息子」(ルカ15:11~32)の註解書による考察

イエスは、民衆たちに多くの譬え話を用いてキリスト教を伝えている。その内容が分かり易いことから、多くの人々の支持を受けるに至ったとも言われている。放蕩息子の話は、イエスが語った話で、「見失った羊」「無くした銀貨」に次ぐ3つ目の譬え話である。

『ティンデル聖書注解ルカの福音書』において、この放蕩息子の話を「多くの者が、この秀逸な物語をあらゆるたとえ話の中で最も美しいと見なしている。これは確かに、あらゆるたとえ話の中で最も愛されたものの一つである。」¹¹⁾ とあることから、この聖書箇所を通して語られる神のメッセージの奥深さに、読み手の心が惹かれることもその魅力であろう。特に、対照的な兄弟の譬え話からは、私たちの生き方そのものに迫る神からの問いかけを感じる。

この聖書箇所を取り扱った紙芝居4作品を分析した結果、共通している点は、物語の最後で父親によって諭された兄弟が和解したという結末である。4作品の絵を見ると、父・兄・弟の3人が晴れ晴れとした表情で微笑んでいる姿が描かれている。このことにより、読み手である子どもには「兄弟が仲直りした」というメッセージが伝わる可能性は否定できない。

一方、聖書には本当に和解したのかどうかについては記されていない。この点における聖書と紙芝居の描かれ方の違いには、筆者らも当然のことながら大きな疑問をもった。それらについて、レオン・モリスは次のように解釈している。「兄息子がそのことば（父のことば）に答えたかどうか

について、イエスはこれ以上話を続けていない。また弟息子が、父の愛に満ちた歓迎を受けてから、どのように生活したのかについても語っていない。これらの点を未解決のままにすることにより、すべての聞き手に、あなたは兄のようであるのか、それとも弟のようであるのかとチャレンジを投げかけている。」¹²⁾ ()内は筆者による。

『NTD新約聖書注解ルカによる福音書』では「この譬え話の父が、自らを義とする嫉妬深い長男にほとんど懇願せんばかりに家の中の祝宴に心おきなく加わるよう勧めている点に、注意しなければならない。」¹³⁾ とあり、長男も神の目から見れば、神から離れて生きている者であると読み取れよう。続けて次のように書かれている点にも注目したい。

「どうやら父親は、長男に次男を弟と認めさせること(32節)ができなかったらしい。」¹⁴⁾ と書かれていることから、兄弟が父によって和解したかどうかについて、明らかではない。

R・シントラー著『聖書物語』には、イエスの語る放蕩息子の話を、聴衆たちは時の過ぎるのも忘れて聞き入り、物語はこれでおしまいなのだろうか、結局のところ兄も祝宴の席につくことになったのだろうか、と想像を膨らませている聴衆の会話が書かれている。しかし、イエスは何も語っていない。やがてイエスが弟子たちと共にその場から離れていった後で、残っていた者たちのうちの一人の女性が、「イエス様は神さまについてお話になったのね」と述べている。¹⁵⁾ このことから、イエスは、これらの話を通して、神という存在について皆に伝えたかったのであると、考えられる。

紙芝居4作品が、「兄弟が和解した」という聖書学的な解釈を超えたところで描かれている事実について、その理由を考えてみたい。物語の結末を、兄弟が和解したと締めくくることにより、読み手には安心感を与えることができる。特に、対象が子どもであることから、そのようにすることが適切であろうと作者は判断したのかもしれない。

こうした各作者の意図を理解することは、重要である。しかしながら、未信徒である保育者、あるいは信徒であっても聖書に精通していない保育者は、これらの作品を子どもに語る際に、聖書の

真実を把握しないまま、紙芝居がもつ独自の意図のみに固執してしまう恐れをはらんでいると考えられる。そのような齟齬を防ぐためにも、作品には解説欄を設けて聖書と作品との違いについて触れ、どのようなねらいをもって子どもに語る必要があるのかを導くことを切に望む。

5. まとめと今後の課題

今回調査した紙芝居において、それぞれの作品を比較することにより、物語の趣旨や読み手への影響について分析することができた。「ザアカイ」と「放蕩息子」において共通している聖書のメッセージは、自らの罪に気づき悔い改め、神の愛に立ち返るという点にある。これらを子どもに伝えるためには、保育者が表面的に紙芝居を捉えるのではなく、聖書理解に基づいた福音的観点からの教材研究が欠かせないであろう。

そうしたことから、保育者が信仰のあるなしにかかわらず、福音的な知識や聖書に忠実に紙芝居を語る力が必要である。それによって、紙芝居を選択し利用する際に、子ども達に聖書のどのようなことを伝えたいのかを明確にすることができる。本研究がその一助となることを願う。

今後は、新約聖書の中の他の作品や、旧約聖書、聖書には属さないその他の文学作品(例として、『もう一人の博士』『くつやのマルチン』などクリスマスをテーマに扱ったもの等)についても、研究を進めていきたい。

<引用文献>

- 1) 鬢櫛久美子、種市淳子「保育のなかの紙芝居- 関屋友彦の福音紙芝居活動を通して-」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.29、pp.1-12、2007
- 2) 前掲

- 3) 『新約聖書』ルカによる福音書19:1~10
- 4) 同上書、ルカによる福音書15:11~32
- 5) 『実用聖書註解書 全1巻』いのちのことば社、p.1119、1995
- 6) レオン・モリス著・岡本昭世訳『ティンデル聖書註解書』いのちのことば社、p.354、2014
- 7) 『実用聖書註解書 全1巻』いのちのことば社、p.1119、1995
- 8) 『聖書』新改訳
- 9) 『実用聖書註解書 全1巻』いのちのことば社、p.1119、1995
- 10) レオン・モリス著・岡本昭世訳『ティンデル聖書註解書』いのちのことば社、p.356
- 11) 同上、p.312
- 12) 同上、p.319
- 13) K.H.レングストルフ著、泉治典・渋谷浩訳『NTD新約聖書註解ルカによる福音書』ATD・NTD聖書註解刊行会、p.395、1976
- 14) 同上書 p.395
- 15) レギーネ・シントラー作・下田尾 治郎『聖書物語』福音館書店、p.222、1999

<参考文献>

- ・『聖書 旧約聖書続編つき』新共同訳、日本聖書協会
- ・レギーネ・シントラー著 加藤善治、茂純子、上田哲世 訳、『希望への教育』日本基督教団出版局、1992年
- ・『実用聖書註解書 全1巻』いのちのことば社、1995
- ・レギーネ・シントラー作・下田尾 治郎『聖書物語』福音館書店、1999

A Study on Christian Kamishibai from an Evangelical Perspective —With a Focus on The New Testament—

Shibata, Tomoyo*

Onoe, Akiko*

本研究では、キリスト教の福音紙芝居を保育に取り入れる際の一つの指針として、紙芝居作品の聖書に基づいた分析と、子どもに語る際の聖書からのメッセージの視点を示すことを目的として、新約聖書のなかから、「ザアカイ」と「放蕩息子」を取り上げた。

その結果、共通して明らかになったことは、聖書に照らし合わせてみると、紙芝居の絵や物語の記述に物足りなさが感じられる箇所が見られたことである。こうしたことは、子どもに対して安易な知識を与えてしまう恐れがある。また本来は、子どもの想像力に任せて話のゆくえをイメージとして膨らませる楽しさや、子どもが物語の豊かな広がりを楽しむことを阻止してしまうことも危惧されよう。

しかし、保育者がそうした作品側の不備も掌握したうえで、聖書に忠実に子どもたちに語り、場合によっては適切な言葉を補う必要もあろう。いうならば、読み手は紙芝居の本文や絵を表面的に捉えるのではなく、聖書理解を要する教材研究に基づいて、福音的な観点から子どもたちに語る必要がある。

キーワード：紙芝居、聖書、キリスト教